



市史通信

第20号

仙台市博物館
市史編さん室



五色沼でスケートをする第二高等学校生 大正13年頃
(東北大学史料館所蔵)

仙台市博物館入口にある五色沼
日本フィギュアスケート発祥の地
といわれている



せんだい 今昔 銀盤にかけた情熱

「あまり風の障^{しょうがい}りのない土^ど境^{けい}下^げだけに極上^{ごくじょう}の油^{あぶら}氷^{ひょう}である。結氷^{けつひょう}2寸~4寸(約6cm~12cm)くらい」。

大正15年(1926)12月3日の『河北新報』は「東北スケートの好適地」として五色沼(青葉区川内)をこのように紹介しています。

これに先立つ明治30年(1897)頃から、五色沼にはフィギュアスケートを楽しむ外国人の姿がありました。氷上に舞うその優美な姿に魅せられ、「自分たちも滑りたい」と思い立ったのが第二高等学校(旧制二高)の生徒たちです。彼らはドイツ語教師ウェルヘルに基礎を学び、一躍、フィギュアスケートの伝道師と化しました。その中の一人河久保子朗は、大正5年に日本初のフィギュアスケート教則本『氷滑』を著し、これが全国に愛好家を急増させるきっかけとなったのです。

大正11年には、二高尚志会スケート部主催第1回スケート大会が行われています。五色沼の結氷状態が良くなかったため、急遽、広瀬川大橋下へ会場を変更するというアクシデントがありました。橋の上に延べ数千人の観衆を集める空前の氷上大競技大会になりました。パン食い競争やスプーン競争、周回競争など五時間にもおよんだ大会の最大の目玉が、優雅なフィギュアスケートです。その妙技に観衆は寒さを忘れて酔い、拍手喝采を送りました。フィギュアスケートは日本では未だ本格的に

行われた例が無く、この大会での公開が日本最初の試みであったといわれています。

翌12年、二高出身者が中心となって誕生した仙台スケート協会は、五色沼を協会専用として借りるため、管理者であった陸軍第二師団と交渉し、なんと兵士を動員してリンクの手入れをすることの承諾も得ます。この結果五色沼はより充実したスケートリンクとなり、昭和6年(1931)には第2回全日本選手権が華々しく開催されました。この五色沼での優勝者が日本フィギュアスケート界初のオリンピック代表選手となり、翌年のレークプラシッドオリンピックで9位に入っています。

今では氷が張ることすら少なくなった五色沼ですが、年平均気温が2℃ほど低かった一世紀前、二高生たちが情熱を傾けた日本フィギュアスケート揺籃の銀盤が、ここに確かにあったのです。



左:二高尚志会スケート部主催第1回スケート大会の入賞者メダル(個人蔵)
右:大正11年頃の広瀬川大橋下でのスケート風景。第1回スケート大会の様子と思われる(東北大学史料館所蔵)

馬のいる風景

男665人、女357人、馬34頭、自転車13台、人力車72台、荷車49台、犬3頭—これは明治39年(1906)5月26日午後3~4時、名掛丁日進堂前(青葉区ハピナ名掛丁商店街)の通行量です。

現在では身近に馬を見ることはほとんどなくなりましたが、かつては野山や畑、田んぼはもちろん、仙台の繁華な商店街の風景にも、馬はごく普通に存在していました。

憧れの奥州名馬

青森・岩手産の南部馬、福島三春地方産の三春駒、そして仙台馬。古来、これら奥州の馬は人々の憧れのまもりでした。たとえば、源頼朝から稀代の奥州馬(生食)〈磨墨〉を下賜された佐々木高綱・梶原景季の両武将は宇治川合戦で獅子奮迅の戦いぶりを見せましたし、織田信長は伊達輝宗(政宗の父)から贈られた奥州馬に感激しています。

さてこれら名馬の姿を想像する時、時代劇に登場する姿をそのまま当てはめることはできません。和種(日本在来馬)はドラマなどで使われる洋種(サラブレッドやアラブなど)に比べてずっと小さな馬なのです。

サラブレッドの平均体高(馬の肩までの高さ)は160~170cm、体重は500kg前後です。対して古代から近世の和種の平均体高は120~130cm、体重は200kg台でした。日本史上の名馬とは、まれに生まれた平均体高を上回る大型馬(それでも

140cmくらい)のことを指し、そのほとんどが奥州馬だったといわれています。

初代藩主伊達政宗以来、藩直轄の馬生産役員組織を整備するなど馬の生産に力をいれた仙台藩には、

名馬=大型馬を求める幕府の馬買い役人が毎年のように来訪したほどです。こうした仙台藩での馬生産は天明の飢饉によって一時衰退しますが、文化年間(1804~1818)当時の奉行(家老)であった中村日向景貞が奮起し、藩主や富商から資金を募って大型馬を買い入れ、仙台名馬を復活させています。

このように大型馬生産は増加していくのですが、馬の総頭数から見ればやはり大型馬は少数派。大多数を占める農耕馬や駄馬の平均体高は、120cm前後だったようです。



「中村日向景貞乗馬図絵馬」(落合観音堂大善院所蔵) 中村は乗馬の名手としても知られていた

近代の大型馬づくり

明治2年(1869)、当時の仙台藩が繁殖用に洋種牡馬1頭(ナポレオン3世が旧幕府に贈ったアラブ種か)を栗原郡に下げ渡して飼養させました。この馬から生まれた雑種2頭が、宮城県内における洋種導入繁殖の始まりです。

その後宮城県は、軍、宮内省から洋種馬を借り受ける一方、明治16年にオーストリア公使館書記官シーホルドの紹介でハンガリー産牡馬5頭・牝馬1頭の計6頭を17,090円余という高額で購入しています。明治20年・翌21年、さらにアルゼリー種牡馬23頭を10,210円余で購入して馬生産の改良発展をすすめました。

洋種導入による改良は全国的に実施されましたが、馬の大型化がすぐさま実現したのではないようです。本格化するのは日清・日露戦争で自国の騎兵隊馬の貧弱さを痛感した政府が、明治38年に「馬政第1次30年計画」を立て雑種生産を促進させてからになります。

宮城県ではいち早く、明治34年から雑種の生産頭数が伸びていますが、政府の馬政計画を機にその伸び幅は加速しました。当時生産された仙台馬は「外貌が美しいうえに性質温良にして忍耐強い。大きな音や異形にも驚くことがなく、将校用乗馬に最適」と、仙台平や埋木細工に並ぶ当時の宮城県重要物産に数えられたほどです。

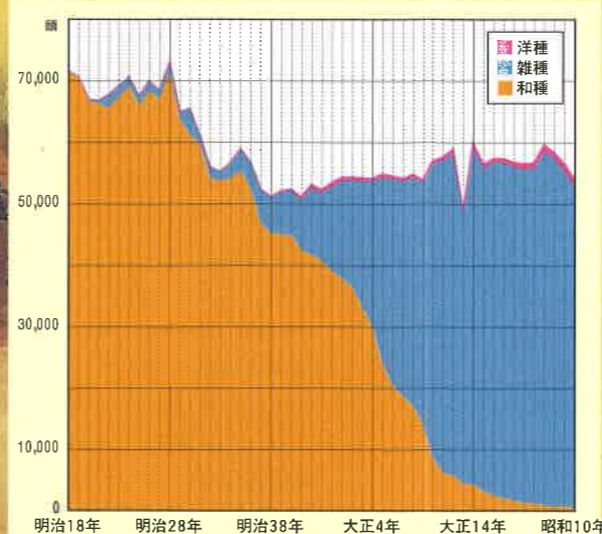


明治41年(1908)、宮城県七北田村(泉区七北田)での軍馬買い付け風景(宮城県「記念写真帖」仙台市博物館所蔵) この頃の軍馬の平均相場は109円(通常売買される馬の約2倍)

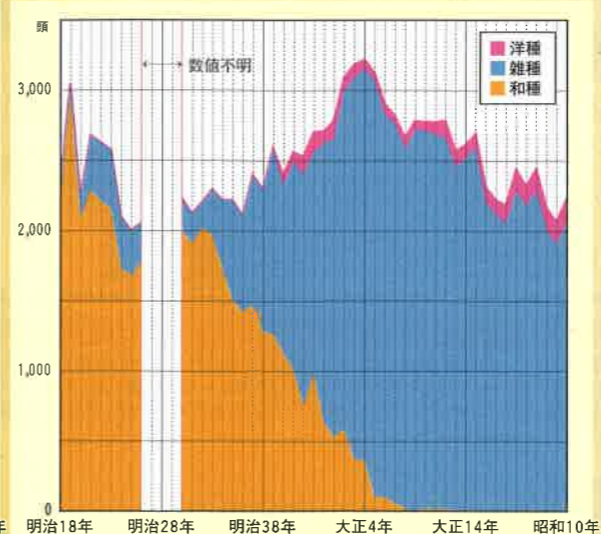


大正時代、秋保石を運ぶ馬車軌道の馬たち(アルバム「秋保石材軌道株式会社」宮城県図書館所蔵)

宮城県内における馬の飼育頭数(「宮城県統計書」より)



宮城県内における産馬頭数(「宮城県統計書」より)



高くなった馬の背

『宮城県統計書』によると、明治18年の県内馬生産数は和種2,219頭、雑種103頭でした。これが政府の馬政計画が立てられた翌明治39年には和種1,268頭、雑種1,323頭と、ついに雑種の生産が和種を上回ります。そして洋種の種牡馬を導入してから約50年後の大正7年(1918)、和種の生産頭数は100頭を切りました。

雑種が稀少だった時期、その価格は和種の5~10倍で、買い手は宮内省や軍でしたが、生産数が増えたために価格は下がり、畑の農耕馬や道を行く駄馬にも雑種が用いられるようになります。大きな馬は秀麗な乗用馬や威風堂々たる軍馬に最適だけでなく、畑を耕したり荷車を引く強い馬力も持ち合わせているのです。

それでは明治39年の名掛丁を歩いていた馬は、どのような馬だったのでしょうか。当時の県内馬頭数は和種45,100頭、雑種6,883頭、洋種163頭でした。ですが和種の多くは栗原郡や登米郡、本吉郡などの農村部に集中しており、仙台市内馬頭数は和種125頭、雑種404頭、洋種35頭という割合です。つまり名掛丁を歩いていた34頭の馬は、雑種の方が多かったのではないかと思います。

宮城県仙台産牛馬組合の明治41年の記録では、雑種の体高は150cm前後になっています。江戸時代の日本人男性の平均身長は157cmほどといわれ、明治になってもほとんど変わりません。つまり、風景を見る人びとの目線の高さは変わらないのに、馬の体高は30cmも高くなりました。見下ろしていた馬の背が、あつという間に目線と同じ高さになってしまったわけです。

モ ノ が た り 仙台

落日が西の山の端にかかり、東天に暗い夜空がその片鱗をあらわす頃、薄紫色で、独特の香りをもつ煙が街中をただよい始める。昭和20年、30年代の仙台の夕暮れはそんな感じだったといえます。このような仙台独特の情景を作り出したのが、当時、燃料として用いられた亜炭です。

亜炭は石炭の一種で、仙台には、青葉山から八木山・大年寺山にかけての丘陵を中心に、おおよそ300万~500万年前に形成された亜炭層が分布しています。ここから掘り出された亜炭が、仙台では明治以降、とくに大正期から昭和30年代にかけて燃料としてさかんに用いられていました。

宮城県の亜炭生産量は昭和10年頃には年間8,000トン前後であり、その4割から5割が仙台市から掘り出されたものでした。その後、日中戦争から太平洋戦争と戦争が激化し燃料事情が悪化するなか、国産の燃料として注目された亜炭は増産が進み、昭和18年には60万トン弱まで採掘量が急増しました。戦後は昭和30年代半ばまで20万トン台を推移しています。この時期の仙台での採掘量はおおよそ1万トン台半ばまで増えていますが、

県内産出量の1割に満たず、代わって三本木(大崎市)周辺が県内産出量の半分を超す最大の産地となっています。しかし、ガスや石油、電気が普及するにしたがい亜炭の採掘量は急減し、昭和40年代半ばにはほとんど採掘されなくなるようです。

亜炭は、石炭より火力は弱い火持ちがよく、安価であり、また、燃え残りが消しやすいために火災の危険性がほとんどないという利点がありました。こうしたことから、工場などで石炭の代用品として用いられたほか、仙台周辺では、風呂や暖房用の燃料として家庭や官庁、学校などで広く使われていました。一時期は市内の小中学校で使われるストーブの大部分が亜炭ストーブであったようです。子供の頃に、家で亜炭を使って風呂焚きをしたり、学校で教室へ亜炭を運んだりした記憶がある方も多いのではないのでしょうか。

一方で、亜炭は無数の廃坑という負の遺産も残しました。無許可での採掘も横行したため、坑道の状況も正確に把握できず、しばしば亜炭坑が原因となる地盤の陥没事故が発生しました。現在では、廃坑の調査とそれを埋め戻す作業がほぼ完了して陥没事故もほとんどなくなりました。 広瀬川牛越橋付近に見られる亜炭層(中央の黒い層)



※仙台の亜炭についてもっと知りたいかたは、『市史せんだい』vol.12 研究ノート「亜炭さまごま」をご覧ください。

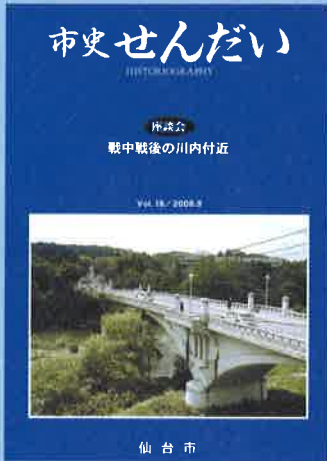
伝野常運「平家物語図屏風」(仙台市博物館所蔵)の右隻 宇治川合戦の先陣争いをする佐々木高綱と梶原景季を乗せた奥州名馬(生食(左)・磨墨(右))

機関誌

『市史せんだい』は
仙台市博物館2階ミュージアムショップにて
好評発売中です

郷土の身近な話題を取り上げた特集記事をはじめ、
史料紹介など、みどころ満載。

A5判 130頁前後 定価 Vol. 9~14 : 900円
Vol.15 : 800円
Vol.16~18 : 700円



最新刊 Vol.18

巻頭は大変貌をとげつつある川内地区の懐かしい風景が蘇る座談会「戦中戦後の川内付近」。
その他、論文「七種連歌会の運営」「仙台付木」、
史料紹介「伊達政宗文書・補遺(二)」「元禄期「仙台領国絵図」関係資料」など内容充実です。

既刊の主な内容 (*Vol.1~8は完売しました)

Vol. 9	特集【まちを守る】 市史セミナー「大きくなる街・速くなる足—都市計画と高速交通の百年」 論文「仙台城下の芸能統制—宝暦七年の規制緩和をめぐる」
Vol. 10	特集【地元学の現在とこれから】 論文「奥州伊達氏の系譜資料について」「仙台の千体仏」 「仙台城本丸跡と政宗の仙台城」
Vol. 11	特集1【仙台と国民体育大会】 特集2【伊達吉村の時代】 論文「大崎八幡宮の壁画」
Vol. 12	特集【仙台の燃料事情】 論文「仙台城本丸大広間跡の発掘調査」 「仙台藩の蝦夷地領有とその経営について」
Vol. 13	特集【仙台の出版事情】 市史セミナー「文書からみた伊達政宗」 論文「宝暦年間の興行事情—宮町での角力・繰芝居」
Vol. 14	特集【仙台の用水と土地改良】 論文「「地方税規則」公布下の青物市場紛争」 「「躑躅ヶ岡岡」にみる江戸中期仙台の遊楽」
Vol. 15	特集【仙台の合併史】 論文「武家屋敷に住む都市民衆—仙台城下町の宿守に関する基礎的考察」
Vol. 16	特集【仙台・戦中戦後の子どもたち】 論文「維新変革と仙台藩の京都事情」「旭紡織株式会社の設立と顛末」 資料紹介「新発見のアメリカ軍撮影写真」
Vol. 17	特集【『資料編 伊達政宗文書』の刊行を終えて】 論文「生出森八幡神社」「奥州名取熊野三山の成立」 史料紹介「伊達政宗文書・補遺(一)」

仙台市史 好評発売中!

仙台の歴史を
掘り下げる

続刊予定

- ◎通史編/近代2・現代1~2
- ◎特別編/慶長遣欧使節
- ◎別編/地域史、年表・索引



宮城県内主要書店、仙台市博物館でお求めになれます。
配送をご希望の方は、電話・FAXで(株)宮城県教科書供給所へお申し込みください。

発売元/株宮城県教科書供給所
〒983-0034 仙台市宮城野区扇町一丁目6-3
TEL 022-235-7181 FAX 022-235-7183
お問合せ先/仙台市博物館市史編さん室
〒980-0862 仙台市青葉区川内26
TEL 022-225-3074

通史編 3,000円(本体2,858円)
資料編 4,000円(本体3,810円)
特別編 6,000円(本体5,715円)
※板碑のみ 5,000円(本体4,762円)
1冊ずつお求めになれます

- 【通史編 1】 原始 ※改訂版とセットとなります
- 【通史編 2】 古代中世
- 【通史編 3】 近世1
- 【通史編 4】 近世2
- 【通史編 5】 近世3
- 【通史編 6】 近代1
- 【資料編 1】 古代中世
- 【資料編 2】 近世1 藩政
- 【資料編 3】 近世2 城下町
- 【資料編 4】 近世3 村落
- 【資料編 5】 近代現代1 交通建設
- 【資料編 6】 近代現代2 産業経済
- 【資料編 7】 近代現代3 社会生活
- 【資料編 8】 近代現代4 政治・行政・財政
- 【資料編 9】 仙台藩の文学芸能
- 【資料編 10】 伊達政宗文書1
- 【資料編 11】 伊達政宗文書2
- 【資料編 12】 伊達政宗文書3
- 【資料編 13】 伊達政宗文書4
- 【特別編 1】 自然
- 【特別編 2】 考古資料 ※完売しました
- 【特別編 3】 美術工芸
- 【特別編 4】 市民生活
- 【特別編 5】 板碑
- 【特別編 6】 民俗
- 【特別編 7】 城館

お知らせ

「通史編1 原始 旧石器時代」(改訂版)の刊行について

旧石器遺跡発掘ねつ造事件をうけて改訂版を刊行しました。ご購入いただいた元版を博物館の「市史改訂版」係まで送料着払いでお送りいただくか、博物館まで直接お持ちください。お届けいただいた元版に改訂版を添えてお返しいたします。詳しくは市史編さん室までお尋ねください。

「特別編2 考古資料」正誤表シールの配布について

旧石器遺跡発掘ねつ造事件をうけて、『考古資料』のねつ造部分について修正内容を示した正誤表シールを作成しました。『考古資料』をご購入いただいた方に配布しておりますので、詳しくは市史編さん室までお尋ねください。

せんだい市史通信 第20号

発行年月日/平成21年1月31日
編集・発行/仙台市博物館市史編さん室 TEL/022-225-3074
〒980-0862 仙台市青葉区川内26 URL http://www.city.sendai.jp/kyouiku/museum